



経済学部 平成27年3月卒業
おくむら みずき
奥村 瑞貴



留学のタイ語修了式(左端)

私の人生を変えた場所

ボランティア活動と言葉

私は2012年9月から2013年8月まで、タイ王国チェンマイ大学教育学部に滋賀大学の交換留学プログラムにより留学していました。チェンマイ県というタイ北部の県で人生初めての一人暮らしだったこともあり、私の留学は周りの人から助けられ

ながらスタートしました。生活や身の周りのことを人に助けてもらいながら、つたないタイ語を必死に喋っていた当時を思い出すと今も支えてくれた皆さんに感謝の念を禁じ得ません。

私の留学中の生活は平日

授業・休日児童ボランティアと大きく二つに分かれていました。平日はとてむすぐには覚えられそうにないタイ語の教科書を傍らに、毎日言語の勉強に追われ、休日土曜日にはドロップインセンターという児童ボランティア施設へ子ども達との交流に行っていました。

ボランティアは毎週授業で覚えたタイ語を必死に駆使して「子供たちと一緒に遊ぶ」というもので、私自身の言語能力の大きな成長に繋がりました。タイ語でコミュニケーションをとれるようになってからは得意なイラストの描き方を教えるまでになり、言語を習得してこれ程嬉しかったことはありませんでした。元々私は子どもが苦手で、どう接したら良いのかもわかりませんでした。しかしそのうち施設の皆から「絵が描けるお姉ちゃん」として覚えてもらえるようになり、言葉とイラストでこんなにも子供と一緒に過ごせる時間が楽しくなるということに気がつき、自分の中の気持ちの変化を感じました。

施設に通う子どもたちは親からの虐待や犯罪への関与など複雑な背景があると聞きましたが、どんなにあがいてもそれは私に解決できることではありません。私はただ毎週ともに過ごす

時間を楽しんで遊ぶことに力を注ぎました。私にとってはこれぐらいしかできることがなかったからです。ボランティアという形には程遠い活動ではありましたが、子供たちの日々の成長を留学中ずっと見守り続けました。

将来を変えた機会

それから留学の後半期には、卒業論文の研究としてタイの環境問題について活動させていただく機会を持ちました。チェンマイ大学理学部のチームに同行し、カドミウム汚染地帯の農業者の経済調査を始めました。かつて日本がイタイイタイ病として経験したカドミウム汚染がタイで起きているということ、少しでも日本に発信することができればと論文を書きました。そしてこの活動が縁となり、大学院に進学することになりました。それまで大学院という進路を考えたことがなかったため、留学は私の将来を大きく変えた機会だったと今は思っています。

タイでの生活を通じて

タイはとても魅力的な国です。私はタイ留学中、日本で味わえない季節・人との交流・感情を体験することができました。雨季の酷暑は部屋に発生する害虫に悩まされ、一方で冷たくて美味しいコーヒーやかき氷に魅了されていました。また子ども達や友人、先生など心優しいタイ人・留学生仲間たちに囲まれて寂しい思いをすることもありませんでした。寂しさをあまり感じなかった代償に、他のマイナスの感情をたくさん味わいました。日本語も日本文化も知っているのに、外国というフィールドでは違う言語と文化に翻弄され「彼らの当たり前のこと」が理解できない苦悩や焦りが一番苦しかったです。海外では「私の当たり前の物・事」が当たり前でなくなってしまう。その体験だけでも「この留学は本当に価値のあるものだった」と私は感じています。



タイ語のクリスマスメンバーとクラトン(灯籠)作り



タイ人・日本人でのよきこい披露のイベント



ボランティア施設